

第3回関西家庭医療研究会公開セミナー

コミュニケーション・ワンダーランド@さくらくりニック

日時：2007年7月28日(土) 14:00～18:00(+懇親会)

場所：さくらくりニック(尼崎市武庫元町2丁目12-1 フェルティ武庫元町 / 06-6431-5555)

参加費：1000円(懇親会費は別)

PART 1: 住みなれた家で死ぬということ

～ホームホスピスケアの現場から～

午後2時-3時

桜井 隆(さくらくりニック)

遠方からお越しの方は
宿泊も可能です!

PART 2: 講演: 三者対談形式

「安楽死を考える」 オランダ赴任中に妻が卵巣

がんで在宅死～家族が見守った最後の自己決定～

午後3時30分-6時

桜井 隆(医師: 進行&司会)

小嶋 紳司(遺族)

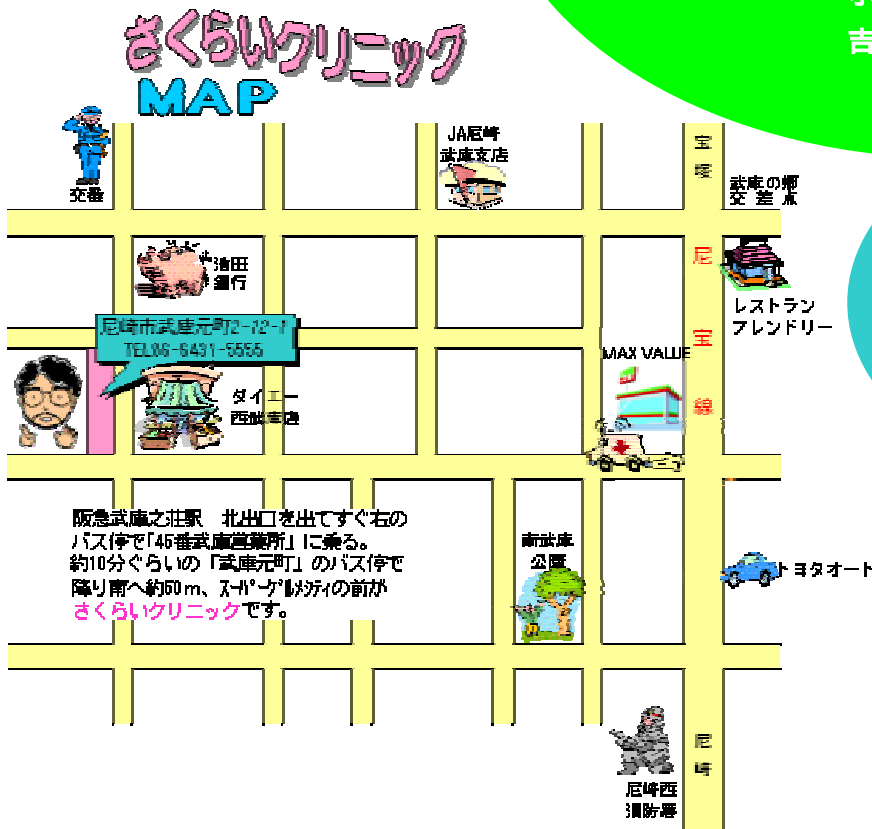
吉田 利康(遺族)

PART 3: 懇親会

午後6時半～??

みんなでわいわい本音のトーク

実はこれが一番おもしろい?



参加希望者は、おなまえ、性別、ご所属、卒後年数、メールアドレス、緊急連絡先(当日でも連絡がつく連絡先)を明記の上、件名を「コミュニケーション・ワンダーランド申し込み」とし、電子メールで ht69_nnw@aioros.ocn.ne.jp までお申し込みください(担当: 竹中)

PART 1：住みなれた家で死ぬということ～ホームホスピスケアの現場から～

桜井 隆（さくらクリニック）

あなたも私も
仕事が終われば家に帰る、
それと同じように
人生という仕事が終わる時は
家に帰ろう。

もっと高く、力強く、遠くへ飛びつづけたい。

医療はそんな命をせいいっぱいささえようと必死にがんばってきた。

移植、再生、遺伝子治療、すべてはその目的のために進歩してきた。

でもすべての命には終わりがあり、着陸するときが必ず来る。その最終ランディングをふわっと支える、それが“ホスピスケア”と言えるだろう。

そしてそれが住みなれた家でできるのならもっと素敵なおことに違いない。

住みなれた家で、地域でゆったりと有終の美を飾る、そんな人々を家族や、近所の人達や、ヘルパーさんや、看護師さん、そして町の家庭医がちょっとあわてたり、悲しんだり、ほっとしたりしながら、当たり前にかさえる、そんなホームホスピスケアの現場から。

PART 2：『安楽死を考える』オランダ赴任中に妻が卵巣がんで在宅死

～家族が見守った最後の自己決定～ 桜井 隆（医師：司会進行）、小嶋 紳司（遺族）、吉田 利康（遺族）

病院での最期が当たり前になって30年近く。「生、老、病、死」が医療にとりこまれ、日常から隔離されてしまった。20世紀の科学技術の進歩は人々に幸せをもたらすかにみえたが、必ずしもそうではなかったし、また医療の進歩も例外ではない。日常のほとんどを他者に依存して暮らしている我々は、死ぬことさえ専門家におまかせしなければならないのだろうか？ 自己決定の最終段階としての死に方、尊厳死、安楽死、といった問題は決して専門家まかせにしておいていいはずはない。

『安楽死』、よりよく生きて、よりよい最期を迎える、安心して、安らかな楽な最期を迎える、という意味での『安楽死』。ところが、その安楽死については、医療者の独断、暴走の結果の事件としてマスコミで報道され、マイナスからのスタートでの議論を繰り返している。“死ぬこと”を自己決定する、という前向きな議論をそろそろ日本でもすべき時だろう。尊厳死の法制化が準備されているが、十分な検討はなされるのだろうか？ そしてもちろんその議論は医療業界、法曹界、政界といった専門家の間のみで行われるものではなく、広く一般社会に開かれたものでなければならない。

人工呼吸器をつけないこと（非実施）と人工呼吸器をはずすこと（中止）は同じなのか違うのか？ 本人の意志表示が必要か、家族の代理決定でもいいのか？ セデーション（鎮静）はどんな状況で許されるのか？ そして尊厳死、安楽死とは？ 終末期医療に関するこれらの諸問題はあまりに未解決のままで混沌としている。

このセッションではがんの妻を自宅で看取った二人の男性、一人はオランダ、一人は日本で、の経験を元に、大切な人を看取る中で彼等が何を感じ、何を考えたのか、限られた命を生きること、とそれを支えるということの中から最期の自己決定としての尊厳死、安楽死について前向きに考えてみたい。

安楽死させるということ

20XX年 0月0日

「先生、よろしくお願いいたします。
ほんとうにこれが最後のお願い。」

Kさんはやせた頬で、にっこり微笑んではっきり言い切った。ご主人もしっかりうなずいて同意を示した。でもベッドの向こうから見つめる息子さんの刺すような視線を感じて、あなたは思わず目をそらしてしまった。

あなたは慣れたプロの手つきで駆血帯を撤き、翼状針を彼女の肘の血管に差し込んで、いつものように血管を確保すると注射器のシリンダーを押そうとしていた。でも、注射器に充填されているのは・・・

すべての条件は整っている。本人、家族の誓約書、複数のドクターの余命6か月以内、という診断書、そして地域倫理委員会の安楽死容認の決定書。

安楽死法成立を心待ちにしていたKさんは間に合ってよかった、とほんとうに喜んでおられるようだった。

これはプロとしてやるべき責務だ、あなたは、もう一度自らを奮い立たせるように乾いた唇を噛みしめてからかすれる声で言った。

「Kさん、いいんですね、ほんとうに注射しても。」

「ええ、ほんとうに、お願いします、先生。」

さようなら・・・ありがとう。」

彼女の顔から目をそらして、あなたは右手の親指に力を込めてシリンジを押しはじめた。

でも、いくら力を入れてもなぜか動かない。どんなに押してもびくともしない。

そ、そんなバカな・・・両手を注射器に添えて力一杯シリンジを押そうとした、

その時

目覚めたあなたはベッドにぐったりと横たわっていた。握りしめて汗ばんだ指をゆっくりとひらいて、ほっと息をはきだしてみた。

青く光る時計の針はまだ4時25—6分前、夜明けまでにはまだ時間がある。

夢でよかった、と思えるのは今のうちだけかもしれない、と考えていた。